

48 死生観の歴史的観察

杉田 暉道

(医) 明佳会 介護老人保健施設すこやか

演者は死生観を「生と死の関連についての考察」と定義して、この問題を検討したい。まず各宗教が死についてどのように考えているかについてみると、先ず仏教は、世を六つの世界(六道)に分け、人間は死ぬたびにこの六道のいずれかに輪廻転生を続ける。したがってこれから解放されるには、修行して解脱しなければいけないという思想である。しかしこれでは多くの人を救えない。そこで多くの人が救えるように考え出されたのが大乘仏教である。儒教は、人間を精神と肉体とに分け、精神の主宰者(魂)と肉体の主宰者(魄)とが存在すると考えた。そして魂と魄が一体となっている時は生、分離している時は死とした。死後、分離した魂と魄を呼び戻す方法として、招魂再生の儀礼を考え出し、これが祖先崇拝、祖霊信仰の形になった。道教

の死生観は不老長生である。神道は死霊は死後三三三年から五〇年経過すると死穢がなくなり、完全に浄化され、祖霊、祖先神(氏神)になると考えた。キリスト教は、人間は神によって作られたものであるから、神のおられる天に召される。ただし死亡者が天に召される為には生前の罪を懺悔しなければいけないとした。ついで時代を追って各時代の人の死生観を観察しよう。先ず西行(平安末期―鎌倉初期、七三才)についてみると、本名は佐藤義清といい、北面の武士で莊園の武士であった。歌人として名高く、二三才で出家した。その理由として盛衰転変の現世に対する厭世観説、友人の急死による無常観説、さらに高貴な女人待賢門院璋子への悲事説などがあげられている。彼の死生観をよく示す和歌として、「願はくば花のしたにも春死なん。そのささらぎの望月のころ」をあげることができる。これは自分が死ぬ時は、花が咲いている時で、その月の満月の時にしたいと述べ、さらに別の歌で来世には月の光をあかず眺めていたいと述べている。すなわち西行は現世と来世は続いていると考え、しかも現世と

来世においては花と月がなくてはならなかった。また当時の人々に強い衝撃を与えたのは、彼は、「願はくば」の歌を詠んでから一〇年後に弘川寺でまさに花盛りの建久元年二月一六日に命を終ったことである。つぎに徒然草を著わした吉田兼好（鎌倉末期）についてみると、徒然草第一一二段に「身も苦しく心の暇もなく、一生は雑事の小節にさえざられて空しく暮れなん。日暮れ、途遠し。吾が生既に磋陀たり。諸縁を放下すべき時なり。」ついで第一〇八段に「されば道人は日月を惜しむべからず。ただ今の一念、空しく過ぐる事を惜しむべし。」とある。ここでは兼好は迫ってくる死を乗り越える方法として、まず諸縁（生活をうまく行うこと・人事・技能・学問など）放下を積極的に行うことを説き、ついでただ今の一瞬を有意義に心静かに過すことをすすめているのである。さいごに養生訓の著者である貝原益軒（江戸時代、寛政期、八五才）は、養生訓の冒頭に「人身は至りて貴とおもくして、天下四海にもかへがたき物にあらずや」と記し、身を鴻毛の軽きに比し、君のため身命を捨てるといふ道徳がま

かり通っていた時代においては、極めて革新的な思想であった。ついで養生訓は健康の目的はじつに人生を真に楽しむためにあると言い、楽しみについて次のように述べている。すなわち「およそ人の楽しむべき事三あり。一には身に道を行ひ、ひが事なくして善を樂しむにあり、二には身に病なくして快く樂しむにあり、三に命ながくして、久しく樂しむにあり。富貴にしても此三の樂なければ、真の樂なし」と記している。味うべき言葉である。さらに先の吉田兼好と同じく人生の短さへの切迫感から寸陰を愛惜し、瞬間を有意義に生きるという死生観を持っていた。

最後に演者は死生観について、われわれの人生は仏教の「空」であると体得しているので、生と死は河の流れと同様に連続していると信じている。